

小池光・加藤治郎・花山多佳子・米川千嘉子
『気鋭の四歌人が輪番で執筆する特別企画』

20世紀 歌人群像

問もなく21世紀。近代短歌から現代短歌へ…
短歌はの100年ほどのような足跡を残してきたのだろうか。
この時代を生きた歌人にスポットをあてて20世紀の短歌を検証する



14
佐藤佐太郎
花山多佳子

第一章 人と時代

佐藤佐太郎は明治四十二年十一月十三日、宮城県柴田郡大河原町大字福田に生まれた。農業、原左衛門、母うら、の三男である。幼時、父母と茨城県多賀郡平潟町（現北茨城市）に移る。大正十三年、十五歳で平潟尋常高等小学校を卒業。翌十四年、岩波書店の公券によって入社する。同僚にアララギ会員がいて、十五年、佐太郎もアララギに入会した。

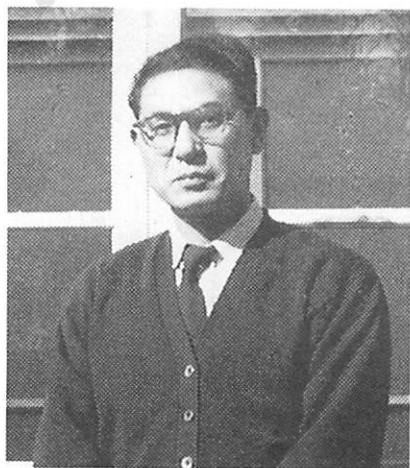
昭和二年、初めて斎藤茂吉（まきよし）に見える。茂吉四十五歳、佐太郎十八歳の時である。以後、佐太郎は脇目もふらず、ひとすじに茂吉に師事する。アララギの新人として頭角をあらわし、昭和十五年、歌壇の中堅新人の合同歌集「新風十人」に、前川佐美

歌人群像



雄や齋藤史らとともに選ばれ一五〇首を掲載する。同年九月、三十一歳で処女歌集『歩道』を出版した。茂吉が愛情のこもった序文を寄せている。『歩道』について後に上田三四二が「おそらく、これほど力みのない処女歌集もまた、まれであろう。『歩道』に野心がなかったとはいわぬ。しかし、この淡々たる作風は、およそ客気に満ちた野望とはほど遠い、成人の落ち着きを見せている。輝く青春というものはここにはない」と書いている。その静謐さのなかに、現代人の微妙な陰影はまぎれなくあり、『歩道』は広く読者の支持を得て、二年間で四版を重ねるほどよく売れた。

昭和十七年、『歩道』以前の初期の作品を収めた『軽風』を出版。この年、咯血し、しばらく静養する。十九年、戦時詠を含む『しろたへ』を出版。二十年三月、家族を郷里茨城平潟に疎開させる。五月、雑誌「歩道」創刊。同月に東京空襲により家財を焼き、岩波書店を辞めて郷里に疎開した。八月一日、山形に疎開していた茂吉を訪ねる。十五日終戦。九月には上京して「アララギ」の復刊編集に携わった。二十二年、独力で図書出版永言社を興し、『立房』を刊行する。冒頭に終戦詠を置いて「見



昭和30年ごろ。

馴れつなほ寂しきか人たちて防空壕をうづめ居る時」など戦後の感慨がにじむ歌集である。「私は自由になる時間が欲しいと思つて独力で図書出版をはじめた。そして幾ばくもなく挫折した。それから養鶏をはじめたが、私の企図は一つとして成功せず、敗戦後の数年を貧困の中に送迎したのであった。」（『帰潮』後記）という生活にあつて、歌への思いはきわめて強く、二十三年より「歩道」に「純粹短歌論」が連載される。「純粹短歌論」は、戦後の「第二芸術論」での短歌批判、否定に対し、純粹な「限定」による短歌定型の極小の力への信念によつて、応えようとしたものでもあった。その実践は、二十七年刊行の『帰潮』に結実する。『帰潮』は佐太郎短歌の輝きと魅力を最も印象づける歌集であり、第三回読売文学賞を受賞した。

昭和二十八年二月、齋藤茂吉が七十一歳で逝去した。佐太郎四十四歳、十七歳のときよりの師とここに永別した。十一月、『純粹短歌』を刊行。茂吉亡き後、三十年代は『地表』『群丘』では自然、都市風景の素材領域を広げ、『帰潮』の感受の美、繊細から、重厚さへと変化を見せる。その後の佐太郎は、宮柁二と並んで歌壇の双壁として多忙に充実した仕事を続けた。

『齋藤茂吉言行』『重馬山房随聞』など茂吉にかかわる書も多い。五十代後半より漢詩に深い関心をもつようになり、特に、蘇東坡（北宋の詩人）の詩に傾倒して、その影響は『形影』以降後半の歌集に独自の味わいをもたらした。昭和五十九年、宮柁二とともに芸術院会員となる。六十一年、宮柁二が逝き、その十日ほど後、脳梗塞で入院、翌六十二年八月、肺炎をおこして永眠した。七十八歳であった。

第二章 歌と時代

佐太郎の歌の出発と形成は茂吉との出会いとひたすらな師事にある。昭和初期のさまざまな短歌運動、プロレタリア文学や口語、自由律などに佐太郎が関心を持った形跡はない。むしろ、何でも詠み込んでしまう巨大な歌人、茂吉に対し、自分は何を継承し、独自の方向を見出せるかが、佐太郎の課題であったと思われる。処女歌集の『歩道』には、すでに、その佐太郎の選んだ道がはっきりと表れている。それは「限定」という方法である。新奇な目立つ表現を一切とらず、歌う範囲も、自分の日々の生活に密着した舗道や街路樹や電車や、天候といったもののみ限定する。内面と剝離しない一続きの対象を歌うことによって、折々の微妙な個の陰影を浮かび上がらせる。

佐太郎の歌集は戦前の『歩道』『軽風』『しろたへ』、戦後の『立房』『帰潮』『地表』『群丘』『冬木』『形影』『開冬』『天眼』『星宿』『黄月』とあわせて十三冊があり、六六二〇首を数えるが厳選主義であったから、いい歌は多い。その中からいくつか鑑賞



昭和23年、東京・世田谷の立花宅。中央が茂吉（白ひげ）右後3人目が佐太郎（●）、▲印が志満夫人、右隣は尾崎左永子。

してみたい。

連結をはなれし貨車がやすやすと走りつつ行く線路の上を

『歩道』

昭和十年作。この時期には同じアララギの先行者土屋文明が『山谷集』を出し、「横須賀に戦争機械化を見しよりもここに個人を思ふは陰惨にすぐ」といった散文調で、視野を拡大せんとしていた。対するに佐太郎はことさら、こうした何事もない日常の断片に目を向ける。しかし「連結をはなれし貨車」などかつて歌われたことはなかった。「やすやすと」は直感でとらえ得た表現で、そこに作者が入り込んでいる感じがある。「線路の上を」は、当たり前なのだが、その当然を言うところにこの歌の意味深さが生じている。貨車だけを歌って、自分の思いや時代のことは何も言っていないにもかかわらず、何か象徴的、暗示的なものが出ている。写生を単純化していくと、自ずから象徴に至る、という茂吉の言葉の、独自の継承がここにある。同時に近代人茂吉とは異なる、都市生活者の現

代的な孤独感、よりどころなきがあり、『歩道』が当時、非常な好評を博したのも肯ける。後の『帰潮』に「連結を終りし貨車はつぎつぎに伝はりてゆく連結の音」があり、ともによく上げられる歌である。

今しばし麦うごかしてゐる風を追憶を吹く風とおもひし

『帰潮』

昭和二十七年出版の『帰潮』は、多くの歌集の中で、最も生彩があり、魅力的な輝きに富む。こんな甘やかな歌もまじる。「追憶を吹く風」という感じと言葉の発見。瞬間の断片の中に名状しがたい空気が気配を感じさせるのが佐太郎の歌である。それを捉えるのは写生ではなく、佐太郎の内面から来る直感であろう。この歌の二首前に「うらがなく風なぎたる夕暮のかかるいとまに麦はのふるか」があり、こちらもいい。「今しばし」「かかるいとまに」といった時間の接続の用法が、漠たる余韻になっているのも佐太郎調のひとつの特徴である。

しろじろと虎杖の咲く崖が見え幸のなき曇につづく

『帰潮』

崖に虎杖の花が咲いている、戦後まだ都心でも見られたであろう日本のありふれた景色だが、いかにもわびしい。丈高い花がしろじろと、曇天のしろさにけじめなくつながっている、という人の目を引かない茫漠とした景を歌うのも佐太郎らしいが、特に「幸のなき曇」という表現をとるのは佐太郎しか考えられない。内面とそのままひとつづきの「曇」であり、それは「見

● (佐藤佐太郎)

え」……「つづく」という文体のねじれにも表れている。一首の中で「幸のなき」は言われてみれば納得するがそう当然ではない。それはたとえば「昼すぎの不吉なる春の曇日に約束ありて家いでて行く」の「不吉なる」も同じだ。境界や出来事に一切ふれず、曇りや風や雨に内面が詠嘆されるのである。『帰潮』の後記に「戦後の生活を『貧困』に縮図した」とあるように、仕事は挫折し生活は苦しかった。しかし佐太郎の鬱や不安はもっと根源的なところから来ている。むしろ戦後の貧困の苦は人々の共通感情であったがゆえに、佐太郎は自らの負の感情を解き放つ契機を得たようにも思われる。

地下道を出て来つるとき所有者のなき小豆色の空のしづまり

『冬木』

空はたしかに所有者はないのであるけれども、そう表出されるのはめずらしい。佐太郎は社会や政治を歌わないとよく言われるが、こういう歌の中に、底ごもる人間社会への鬱勃たる思いが覗いているような気がする。地下から地上へ出て空を見上げるといふ動きは「所有者のなき」を導くのにごく有効に働いていよう。そ



昭和40年、愛媛県来島海峡中渡島信号所。志満夫人と。

して「小豆」という地上の生産物によって空の色を表しているのも、意味深い。その場のリアリティを確実にするために言葉が周到に選ばれ練られているのが佐太郎の歌である。

すさまじきものとかつては思ひしか独笑をみづから
ゆるす

『形影』

『形影』は五十代後半の作品を収めるが、この時期、体調悪く入院したこともあって、老いを意識し始めた歌がかなりある。これもその一つといえる。すさまじきもの、と他人の独笑について思っていたともとれるが、やはり自分がすることについてではないかと思う。独笑をすること自体が老いのしるし、というのではなく、「みづからゆるす」に中心がある。一般的な老いの自覚とは異なった、孤独な自己洞察に貫かれた発見がありどきりとさせられる。しかし、いやにきっぱりと言ったところ、ユーモラスでもあり、鋭さのなかに文人的ゆとりも感じられるのである。

冬の日の眼に満つる海あるときは一つの波に海はか
くるる

『開冬』

「短歌は……あらゆる文学のうちで最も箴言しんげんに近い」と『純粹短歌』の中で言っているが、この歌などはその好例であろう。非常に簡明に、眼と海と波だけを言っているために、「ごく象徴的で意味深い印象になっている。「一つの波に海はかくるる」は自然の描写ではない。抽象化された一つの真実なのだ。「あるときは」がその印象を強めているわけで、反復を一挙に普遍へと

昭和51年、芸術選奨受賞式。



ダイナミックに盛り上げている。

蛇崩の道の桜はさきそめてけふ往路より帰路花多し

『天眼』

昭和五十年に脳血栓のうりっせんをわずらって以来、六十代後半より佐太郎は自宅近くの蛇崩遊歩道ひやまぎの散策を日常とするようになった。

「街川をおほへる遊歩道ありて常見ぬ家の裏側に行く」という、蛇崩川をふさいだ遊歩道である。晩年ここで多くの秀歌が生まれている。狭い行動半径で歌が躍如としているのは佐太郎らしい。この歌、行きより、帰りに花が増えていて、というのは実際ではなく、感覚だろう。こういう感じがするときが確かにある。それを「多し」と言い切ったのは、漢詩的なのでもあろうが、大胆である。佐太郎はつねに感受繊細にして、ひらめく言



葉には大胆だった。

第三章

短歌史におけるポジション

「『限定』するという働きを中心として考えるとときに、短歌の特質は瞭然とするだろうと私はしばしば思った。……短歌は純粹な形においては、現実を空間的には『断片』として限定し、時間的には『瞬間』として限定する形式である」と佐太郎の『純粹短歌』は言う。この解説自体はとりたてて特別のことを言っているわけではない。しかし、近代から現代短歌への流れは、

限定を打破せんとして素材領域も、表現方法も拡大していくこうという方向にあったから、この「限定」という言葉は特異にさえひびく。「限定」をあえて強く打ち出したのは、佐太郎に非常に内的必然性があったと思われる。

歌論より、『歩道』や『帰潮』を読む方が「限定」の具体的な意味ははつきりするだろう。他の歌人が歌っていることで、佐太郎が歌わなかったものは多い。

(佐藤佐太郎)

境涯も回想も、生活のあれこれも、恋愛や家族との関わり、社会、時事も歌わない。とても寡黙な歌人なのだ。その場の心理が歌われていても、その背景や、理由を歌集に見ることは出来ない。瞬間や断片に暗示するのが、唯一の道であるような、孤獨な生の苦の深淵を抱えていたとも言える。

戦時中にも空疎な戦争歌をつくったこと、敗戦後の第二芸術論での短歌否定は、「限定」を論として、信念として固めさせることになった。短歌定型の短さ、その物理的な限定性こそが、強みになるような方法はやはり「限定」することなのだという信念である。「帰潮」は歌のために生活すら限定することによって、暗示力、言葉のひらめきに満ちた収穫を得た。写生派では排されがちな比喩も相当に使われている。守りに徹するようである、意外にその表現方法は現代的で新しい。

戦後、佐太郎は宮柾二と並び長く代表的歌人として、大きな影響力を与えた。二人ともに、出自エリートでなく、孤獨な内面性を根底に持ちながら、多産な仕事をなし遂げたという点で共通している。作品的にも通底するものがあるが、歌い方はちよつど凹凸といった対照を見せている。佐太郎は自己告白の抑制型であり、写生を通じた美と秩序の中に深く身を沈めて歌い継いだ。それは、また、生活雑報歌に傾いていく写生派の中で、一つの純粹な生き方を指し示したといえるだろう。

(はなやま・たかこ「塔」会員)

※次号は近藤芳美(加藤治郎筆)です。